

第19回理学懇話会のご意見

ご意見
プレゼンテーション「指定国立大学法人及び大阪大学の新しい産学連携」について
とりわけ、高度人材育成が長期的に重要と思う。文理融合型高度人材であろう。
お金・人材等々の制約がある中で課題を抱えていることは理解するが、イノベーション大学の中で米国の大学との大きな違いは何なのか？根本的に何かが違うのかなと感じる。ここにスポットをあてないと本当の解決にならないのではないか。
産学協同プロジェクトにより、収入を増やすのは大事だと思うし、海外ではMITなどは大きな成果を上げているようだ。
基礎的な学問の重要性を学生に教育することが、一番大学に望まれることかと思います。
財務的に苦しい中、よく努力されていると思います。学問分野の大きな流れの中で、阪大の理学研究科がどのような役割や位置を占めているか、もう少し聞きたい気がした。
理学部の強みを増々発掘し、国内外にアピールかつ世界的な成果に繋げるための様々な取り組みが成されている事が良くわかった。ただ、阪大理系の学部・学科の強みは、工学⇔基礎工⇔理学、と1つの大学に基礎から応用まで広く(一部重複はあるだろうが役割分担しつつ)カバーしていることだと考えている。その意味で、「インタラクティブ物質科学・カデットプログラム」は、非常に興味深く、また期待する。人材育成は、もちろん重要だが、このような取り組みが研究プログラムでも実施できないのか。
ご講演「理学研究科の産学連携」について
産学連携は進めていただきたいが、骨太の基礎研究を大切にお願いします。
産学連携ではやはり大学には基礎研究の強化を期待したいが、資金や人材に限られる中、対象領域の選択と集中も必要ではないか。
今の大学には、「戦略」「しくみ」「他研究科と共業」が大事であろう。成果の発信にも力をいれてほしい。
知財の立場として、最初の基礎出願が不十分(=ちゃんと考えて出願されていない)ものが散見されます。しっかりした専門家が必要だと思います。
プレゼンテーション「理学研究科の現状報告」について
お金のリソースを拡大するために企業とのOPEN INNOVATIONを進めるべきだと思います。
社会人ドクターコースは、必要かと思います。産学連携にもつながります。
英語は勿論重要ですが、理学研究科としては学問を追及して頂きたい。
学部英語コース→国際科学特別入試:日本語を学んでまで阪大に来るメリットを提供できるのか？日本で働けるという受け皿がないと難しいのでは？学部英語コースに日本人を増やす。日本人学生が海外からの学生との交流を増やすべき。
全体的に基・工との連携の話が少ない印象だが、そこそが阪大の強みであり、その中でこそ理学科の基礎研究という強み・役割・方向性が生きるのではないか。
理学懇話会全体に関するご意見・ご感想
当懇話会が在ることはいい事だと思います。単なる意見交換会に終わらないように、成果を示していかなければならないと思います。
大学の実績を知る良い機会
産学連携の強化に向け、もっと若手の交流も有効ではないか。
産業界から理学教育・理学研究に期待すること
あまり応用にとらわれることなく、研究者の興味を中心として研究を展開してほしい。どのような研究が大学でなされているかをアクセス出来るようにしてほしい。
基礎教育は重要。①企業内での研究開発への対応力は基礎力で決まる。②幅広い分野の人への対応力も基礎学力次第。
具体的工夫のみではなく、研究の進め方や方法論を学んでほしい。
バイタリティーにあふれた人材の育成を期待。
積極的に意見を述べ、コミュニケーションをとれる学生を育成して欲しい。
基礎研究能力の他にマネジメント力の育成や、周囲をまきこんで仕事を仕上げていくことの大切さを教えていただければと思います。
将来の核となる基礎基盤技術や理論を構築して下さい。
一般的な企業(特に製造業)との連携の場合、大学での基礎研究が自分達の事業にどう役に立つかイメージしにくい傾向があるのでは？そこに理解のある企業、企業の中で基礎研究を担う研究所との共同研究など、ターゲットをしぼる必要があると思われる。
「基礎研究をベースにした産学連携」に期待すること
実用的な結論を理論的に展開することが大学側で大切である。
理・工・医の共同研究開発を期待しています。
基礎研究が、遠い将来、どのように役に立つかのビジョンを描けるトランスレーターやコーディネーターが必要。
是非、基礎研究を推進してほしい。
中途半端な実用化よりも、基礎研究やインパクトのあるシステム・方法論開発をやって欲しい。